

新潟県小学校校長会報

題字…今山政三郎氏

発行所
新潟県小学校長会広報部
新潟市中央区幸西3-3-1
じよいあす新潟会館2階
TEL 025-290-2231
FAX 025-245-6060
E-mail: nksgko@niigata-net.or.jp
印刷所 株式会社 文久堂



新潟県小学校校長会 副会長 堀 井 重 人

「疾風に勁草を知る」一年

中国の古典「後漢書」には、困難にあつてはじめて強さが分かる意として「疾風に勁草を知る」の言葉が示されています。激しい風が吹いた時に、折れたり倒れたりしてしまう木と、しなやかに曲がりながらも耐え、たくましく成長していく草を対比して得た言葉のようです。毎年のように新潟シティマラソンを応援に来てくださる高橋尚子さんが、レースを想定し座右の銘としていえる言葉でもあります。

コロナ禍の中で学校の経営、学習指導要領の全面実施、学校における働き方改革の推進など、正に今私たちはこれまでに経験したことのない「疾風」の中にいることを感じます。例年通り進められることは、ほとんどないのではないのでしょうか。

九月末に行われた全連小調査研究担当者連絡会で、主に学習指導要領の実施について、他県の皆様と現状や課題

の情報交換をしてまいりました。ウィズコロナの現在においても、知徳体のバランスのとれた成長発達を促す日本型教育の大切さが指摘されたものの、課題として現状で「深い学び」を実現する難しさ、直接体験の不足から社会性育成の難しさ、運動習慣の変化からくる体力不足の傾向などが挙げられました。また、多くの地域で今年度から導入される一人一台端末の活用など「個別最適な学び」に向けた研修が急務であることが確認されました。

待ったなしの課題「疾風」にさらされる今、チーム学校を牽引する校長のリーダーシップが日々求められています。それを下支えする校長会の役割もますます重要です。校長会での活発な情報交換や地教委への要望などを進め、各校がしなやかに現状を乗り越えて信頼を勝ち得る「勁草」を目指したいものです。(柏崎・刈羽 柏崎小学校)

大会の概要

全連小・京都大会提案発表

第七十二回全国連合小学校長会研究協議会京都大会は、新型コロナウイルス禍により紙上発表となった。

大会主題は「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」、副主題「ふるさとの自然・歴史・文化を愛し 他者と協働しながら豊かな未来社会を創る子どもの育成」で、V教育課題第十一分科会の『社会形成力』で提案発表を行った。分科会研究主題は「社会形成能力を育む教育活動の推進」、

求められる。このような視点に立ち、子どもたちが自己の役割を認識し、他者と協力しながら、よりよい社会の実現に貢献しようとする意欲をもち、主体的な態度を身に付けるための教育活動を推進する上での、校長の果たすべき役割と指導性を明らかにしたものである。

発表の主旨は、次のとおりである。

発表題「社会形成能力を育む教育活動の推進における校長の役割と指導性」

他者と共に生きる生き方を学ばせ、実践(準備)させることを目指して」

一 具体性(像)のある学校教育ビジョンの作成

○学校推進哲学の明示

○目指す子どもの姿の設定

○教育活動推進上の視点の設定

二 目指す子どもの姿の発信・解説

三 教育活動を仕組む

○新潟市地域と学校パートナーシップ事業の積極的活用と学習参加

○第六学年「職業体験」実践から地域住民の学校運営への参画意識を醸成する

五 当面する社会問題に向き合わせる

○偏見や差別等の人権に関わること

【詳細は京都府小学校長会HPを参照】

(新潟 鳥屋野小学校)

大会の概要

関ブロ・茨城大会提案発表

一 はじめに

新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から大会が中止となった。私の参加部会は第一群学校経営、分科会Aテーマは「学校づくり・人づくりを確かにする学校評価の工夫」であった。紙面で、提案の骨子をお伝えする。

二 提案の概要

「コミュニティ・スクールを中核にした地域・保護者・学校による学校評価」

(一) 学校経営の柱

当校はコミュニティ・スクール(以下CS)として地域と連携した教育活動を展開、「ふるさと田井を愛し、ふるさと田井で躍動し、世に役立つことを喜びとする子どもの育成」を学校経営の柱として人づくりに取り組んでいる。

(二) CSの両輪となる組織

学校経営、教育活動を熟議する学校運営協議会(CMT)と教育活動をサポートする協働の地域学校協働本部(CST)。この両輪が中核となつてPDCAを行っている。

(三) 人づくりの取組を評価(学校評価)

ア 内部(校内)評価 年四回
イ 外部評価

市共通・学校独自アンケート年

二回ア、イの結果をCMT(年三回)の場で熟議(評価)を行う。

数値化された項目、数字に表れない子どもの姿、地域・保護者の支援の様子等評価を行う。

ウ 学校評価アドバイスの会

CMTの結果を説明し、有識者(元校長、大学教授)から、アドバイスを受ける。

三 提言

○校長の目指す学校の理念が学校評価により、地域・保護者に浸透してきている。今後もCSを中核とした教育活動・学校評価により、地域全体で子どもを育み、人づくりへの意識を高める。

○学校経営の柱の具現に向け、社会(地域)に開かれた教育課程を創造、PDCAによる教育活動の評価を推進する。

四 おわりに

後日、提案の冊子を見て県外の行政、及び学校から問い合わせをいただいた。今後も、CSを基盤として、地域・保護者・学校で田井の子どもを育みたい。

(見附 田井小学校)

大会の概要

関ブロ・茨城大会提案発表

一 はじめに

「分科会F 人材育成」の提言内容は、「これからの学校運営を担う若手人材やミドルリーダー・管理職の育成に関する提言」である。分散会の視点として、「困難な時代を乗り越える能力と豊かな人間性を身に付けたミドルリーダー・管理職の育成」が示された。

二 提言主題及び副題

「意欲に火を灯し、自信を高めることによる職能向上」→学校運営への主体的参画によるミドルリーダーの育成

三 研究の概要

(一) 妙高市総合教育基本計画

妙高市は、コミュニティ・スクーールを中核として社会とともに歩む学校の具現を目指し、学ぶことのよさを実感できる「ほんもの教育」を構想・展開している。

(二) クリエイティブな教育活動

学級担任が、子どもと一緒に教育活動を創造することを第一義として学校経営に臨んでいる。教師が得意分野で力を発揮し、子どもにとって魅力ある授業実践ができるよう教師の時間の確保に努めている。なお、校内研究授業は、教師の得意とする

教科で実施することとしている。

(三) 保護者に伝える子どもの学び

保護者に学級経営の方針と具体的な評価、改善の取組を伝えている。特に大切にしているのは、子どもとともに創る教育活動の意味を子どもの学びの姿として伝え続けることである。

(四) 分掌主任として力を発揮

小規模校であることから、分掌主任として学校全体を動かす気概を持ち、目指す子ども像を具現するという目的を共有し、主体的な取組を進めている。

四 成果と課題を受けた提言

校長は、職員の意欲に火を灯すため、主体的に取り組む教育活動が展開できる環境を整えることを大切にしている。

校長は、分掌主任が様々な立場の職員との企画・運営・評価・改善により学校を動かす経験を積むことを大切にする。

これからもクリエイティブな教育活動を創造できるミドルリーダーが生まれる学校づくりに尽力する。

(妙高 妙高小学校)

市
都
指
定
郡
政
令
郡
政
令
郡
政
令

「明日の佐渡を創る人、 世界と共に生きる人の育成」を目指して

佐渡市小学校長会

「宝の島」佐渡。佐渡には、世界遺産登録を目指す佐渡金銀山や世界農業遺産、佐渡ジオパークなどの世界的な「三つの宝物」がある。また、能や鬼太鼓を代表とする芸能、トキが舞う豊かな自然、歴史や文化も佐渡の宝である。

佐渡市小学校長会は、二十二名の会員で構成されており、佐渡市学校教育の基本理念「明日の佐渡を創る人、世界と共に生きる人の育成」を目指し、定例校長会や研修会を中心とした活動に取り組んでいる。

一 定例会は情報交換の貴重な場

年間十回の定例校長会では、各校における諸問題への対応等の情報交換を行っている。特に、今年度新型コロナウイルス対応が話題の中心となった。各校で、どのような感染防止対策をしているのか、また修学旅行、運動会といった学校行事をどのように実施するか情報を共有し、自校の取組の参考とした。だれも経験したことのないコロナ禍での教育活動の実施。校長会での情報共有、協議の意義は大きかった。

また、定例校長会の前段には、教育委員会の指導・示達の時間を毎回設け

ている。国や県の動向、市の施策など貴重な情報を得る機会ともなっている。

二 研修会は学校経営力を高める場

学校運営協議会における取組や特別支援教育の推進など、会員のニーズに合わせた研修会を定期的に実施している。

また、八月には、下越地区研究集会を兼ねた佐渡市小学校長会研究協議会を行った。研究主題「未来を拓く知を磨き、ともに生きる子どもを育てる学校経営」の下、「校長が主語」のレポートを持ち寄り学び合うことができた。

七月は、小中学校合同で「不登校児童生徒への対応」をテーマに生徒指導研修を行った。スクールカウンセラーの活用や関係機関との連携等、各校における対応や対策について共有でき大変参考になった。一月にも「学力向上」をテーマとした小中学校合同の研修会を予定している。

これから、小学校長会の横のつながりと中学校長会との縦のつながりを大切にしながら、佐渡の未来を担う人材育成に努めていきたい。

学校紹介

地域とともに伸びゆく学びのさと

阿賀町立上川小学校

阿賀町立上川小学校は、令和の時代の幕開けとともに、昨年、旧上川村の二校（上条小学校と西川小学校）が統合し開校しました。

校舎から南には御神楽岳と清流常浪川を望む山紫水明の地、その向こうは福島県という所に位置する当校は、全校児童六十六名の小規模校です。



一 「阿賀学」の実践

町教育委員会が推奨する、郷土愛を醸成する「阿賀学」（自然学・歴史学・環境学・特産学・観光学・未来学）をベースに、地域素材や地域の伝統行事等を積極的に活用するとともに、地域とのつながりをアピールし、双方向の連携を進めてきました。

しかし、昨年度末からの新型コロナウイルス感染症の影響で、特に人との関わりが制限されてきました。このような状況下でも、感染リスクを最小限にし、子どもたちの学びに必要な活動を行ってきました。

特に、数年前から、「ユキツバキ」

を活用する取組に注力してきました。

ユキツバキはご存じのとおり新潟県の県木です。その発見の地は、ここ阿賀町であることから、ユキツバキについて学び、知名度を高めたり、付加価値を付けたりする取組です。

行政や地元企業等に協力いただきユキツバキ油やユキツバキ紅茶をつくりました。



二 希望の学び舎に

「希望の光 かがやけり」
「高き希望を仰ぎつつ」

「雄々しく飛ぼうよ 希望の空に」
「希望のひかり 満ちあふる」

この地の文化といえる各校の校歌の一節に輝く「希望」。

これまでも、地域と深く関わってきた学校。令和三年度からは、コミュニティ・スクールとなることから、新型コロナウイルスと共存する教育活動を模索し、更に学校・家庭・地域のトライアングルをより太く強固なものにし、希望に満ちた学び舎を目指します。

郷土記

日本最古の油田

越の国より燃える水を献る

一 はじめに

新潟県内の石油産出地は、黒川、新津、東山丘陵、西山丘陵、頸城地方などが知られており石油の古名である「臭水（くそうず）」という地名が各地に見られます。

新潟県を含む北陸地方が「コシ（越）」と呼ばれていたころ、日本書紀、第三十八代天智天皇七年（西暦六六八年）の記録に「越の国より燃ゆる土（垂炭、石炭、アスファルト）、燃ゆる水（原油）を献る」という日本最古の原油献上の記述があります。黒川の名も黒い川の流れるほどに原油が湧き出たことからついたと伝えられています。

二 黒川燃水祭

前述のような歴史が一般に知られていないことから、「越の国黒川臭水遺跡保存会」の主催で昭和五十八年から黒川燃水祭が行われています。その内容は、次のようなものです。

(一) 献上採油の儀

この儀式では、リョウメンシダを束ねた道具「カグマ」を用いた昔ながらの方法で、かつての臭水とよばれた原油を採油します。

(二) 点火の儀

この儀式は、先人たちへ感謝の念を捧げつつ、臭水の灯で未来を照ら

し人類文化の発展を祈願するものです。火は地元の黒川小学校の六年生児童が、古式道具を用いておこします。

(三) 清砂の儀

この地で落雷によって燃え上がった臭水への対処法として、後に天智天皇となる中大兄皇子から臭水の神を祀り、清い砂をまくことを教わります。これにより、大火が鎮まったことへの感謝の念を表し、国土の安全を祈願するものです。黒川小学校の六年生も清砂をまきます。

このようにして採油された原油は、七月七日に天智天皇が祀られている滋賀県の近江神宮に献上され、引き続き近江神宮で燃水祭が執り行われます。



献上採油の儀

三 黒川油田の歴史

十三世紀の絵図「奥山莊波月条近傍絵図（おくやまのしょうなみつきのじょうきんぼうえず）」等の古文書にも、黒川の原油産地は「久佐宇津条（くさうつのじょう）」「くさうつ・くろかハ」として登場しています。

(一) 江戸時代の臭水

江戸時代には黒川の臭水は全国的に有名でした。江戸時代中期の図説百科事典「和漢三才図会（わかんさんさいずえ）」には臭水が黒川村より出ることが記載され、江戸時代後期の医者、橋南溪の「東遊記」にはカグマという草を利用して採油する様子が記述されています。また、文化十三年（西暦一八一六年）の越後輿地全図には塩谷から「地中油出る」と記載されています。

(二) 明治時代の黒川油田開発

明治六年（西暦一八七三年）イギリス人の医師シンクルトンの指導で、堅穴井戸が掘られるようになります。この手掘り井戸に木枠をはめて掘る方法により、深い原油包含層まで安全に掘り進むことができ、当地で油の井戸掘りが盛んになりました。山一帯に数多くの井戸が掘られ、原油は地元の人々の生活を潤し、シンクルトンは黒川油田開発の恩人となりました。

(三) 昭和の最盛期と衰退

明治の終わりの頃に黒川油田は一時衰退しますが、昭和十三年頃から採掘が再開されます。昭和十六年頃から帝国石油、大同石油など大企業

の本格的採油が行われ、無数の石油掘削機が立ち並びようになりました。平木田駅までパイプで原油を送油し、新潟の製油場まで運ばれました。そして、昭和十七年頃に最盛期を迎えます。「油の一滴は、血の一滴」と言われた昭和十九年の太平洋戦争中、工兵隊が黒川小学校に駐屯して黒川坂下で原油を採掘し、昭和二十年頃には胎内川沿岸でも本格的に採掘が行われました。昭和三十年頃から産出量も不足し、外国輸入が増加したころから黒川油田は衰退していきます。昭和三十四年から五十一年まで黒川小学校の給食燃料や漁船の燃料として使用され続けました。そして、昭和五十五年頃黒川油田は終焉を迎えます。

四 終わりに

昭和六十年に黒川石油公園が油田採掘跡地の林の中に整備されました。平成四年には「黒川のくそうず」として、県の天然記念物に、さらに平成六年には、国の史跡に指定されました。さらに、平成八年にシンクルトン記念館が開館し、黒川油田の歴史を展示や映像で紹介しています。

（資料提供 胎内市教育委員会）
（胎内 黒川小学校）

県小学校長会
HPへアクセス学校経営に役立つ
情報満載